本末格物説攷

中純夫

はじめに

『大學』の格物をめぐっては、古來「七十二家」の説が有ると稱されるほど、その解釋は多岐にわたった。[1] その中でも近世中國にあって最も影響力を持った代表的解釋は、「格」を「至」、「物」を「事」とする朱熹の卽物窮理説と、「格」を「正」、「物」を「意之所在」とする王守仁の解釋であろう。朱子學と陽明學は中國近世思想史上の二大潮流であり、かつ兩者の思想的立場の相違點は、その『大學』解釋にこそ最も端的に表れていると思われるからである。

ところでこの格物に關しては、格物の「物」を「物有本末」の「物」とする解釋が存在する。本稿では以下、これを便宜的に「本末格物説」と稱する。本末格物説の事例として最も著名なものは、王艮の淮南格物説であろう。ただ本末格物説は王艮以前にも王艮以降にも多數存在し、また中國のみならず朝鮮にも存在する。朱子學が主流を占め、かつ朱子學に對する有力な對抗軸として陽明學が存在し得た中國及び朝鮮近世にあって、朱熹とも王守仁とも異なる格物解釋が存在したことは注目に値する事柄であろうし、またそれを思想史上に如何に位置づけるかは、重要な課題であろう。ただ從來、本末格物説の存在に着目しかつ系統的にこれを論じた先行研究はほとんど存在しない。[2] 本稿では紙幅の都合上、[3] 對象を專ら中國に限定した上で、これに檢討を加えることとしたい。

一　本末格物説の基本的骨格

近世中國において行われた『大學』テキストとして代表的なものは、①『大學章句』、②大學古本、③石經大學である。①は『禮記』「大學」に錯簡衍文闕文有りとする朱熹が「傳第五章」を創作する等、大幅に改訂し分章と注釋を施したテキストである。②は朱熹の改訂を經る前の『禮記』所收「大學」であり、言うまでもなく朱熹以前から存在する。ただ近世思想史の文脈に卽して言えば、朱子學成立以降、朱熹『大學章句』に疑義を抱く人々がこれを批判的に檢證する過程で、大學古本としてその價値を「再發見」する形となった。その典型が王守仁による大學古本顯彰であるが、古本の重視は無論、王守仁以前にも存在する。③は豐坊によって僞作されたものであるが、明代後半期、一定の社會的流布を見たテキストである。[4]

さて、『大學章句』及び大學古本の冒頭部分は以下の通りである。

①大學之道、在明明德、在親民、在止於至善。
②知止而后有定、定而后能靜、…慮而后能得。
③物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣。
④古之欲明明德於天下者、先治其國、…致知在格物。
⑤物格而后知至、知至而后意誠、…國治而后天下平。
⑥自天子以至於庶人、壹是皆以脩身爲本。
⑦其本亂而末治者否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。

①の「親民」を『大學章句』が「新民」に讀み替える以外、この部分までは兩テキスト閒に異同はない。大學古本では⑦の後に

⑧此謂知本、此謂知之至也。

の一文が續くが、周知の通り朱熹は「此謂知本」を衍文とし、また「此謂知之至也」の直前に闕文有りとしてこれを補った上で、傳第五章として後ろに移動させている（所謂「格物補傳」）。

さて、③に對する『大學章句』朱注に明らかなように、朱熹は「物有本末」の一節を上文①及び②を承けてこれを總括する文言として解釋している。[5] また③を上文に關連づけて解釋する點では、王守仁も朱熹と同樣である。[6] そしてこのような解釋に立つ限り、物有本末の物と格物の物とは何ら關連を持たない。しかしひとたび③を、下文④及び⑤を說き起こす一節として解釋するならば、この二つの「物」字は直ちに不可分に結びつくこととなる。卽ち本末格物說は、③を上文とではなく下文と關連づけて解釋する立場に立つのである。そしてそのような解釋は、『大學章句』、大學古本のいずれに據っても獲得可能であろう。

但しテキストとして『大學章句』を採る場合に直ちに問題となるのは、傳第五章の存在である。これは周知の通り格物を卽物窮理と解釋する朱熹の立場を示す基本文獻であり、本末格物說とは本より相容れない。從って『大學章句』を採る本末格物說は、少なくとも朱熹による補傳に對しては、これを否定する立場に立つはずである。

一方、石經大學の冒頭部分は以下の通りである。[7]

①大學之道、在明明德、在親民、在止於至善。
②古之欲明明德於天下者、先治其國、…致知在格物。
③物有本末、事有終始。知所先后、則近道矣。

このように石經大學は八條目の直後に「物有本末」の一節が位置している。從って③が②を承けるとの解釋に立つ限り、ここでも本末格物說は成立し得る。

以上の通り本末格物說は、少なくとも理論上は、上記三テキストのいずれを採る立場にあっても、成立可能である。[8] 更に、自ら獨自のテキストを編定した上で本末格物說を採る場合も有るだろう。

さて、本末格物說が朱熹及び王守仁のいずれの格物解釋とも異なるものであることは言うまでもない。それに加えて、本末格物說における致知も、多くの場合、格物と一體的に把握される。そしてその場合の格物致知はおおむね、八條目における本末始終の整序を意味し、また本始を知ることを意味する。かかる致知解釋は、王守仁による致知解釋、卽ち致良知とも異なるものなのである。

このように本末格物說は、朱熹の格物說を採らず、また陽明學登場以降に關して言えば、その多くは王守仁の致知解釋をも採らない。それだけに本末格物說を中國近世思想史上に如何に位置付けるべきかは、重大課題であると考えるのである。

二　丁若鏞の格致六條說

中國における本末格物說を檢討するに先だって、ここでは朝鮮の丁若鏞による本末格物說として著名な格致六條說に一瞥を與えておきたい。種々の本末格物說を系統的に分類整理していく上で、格致六條說は一つの有力な指標になり得ると考えるからである。

丁若鏞（號茶山、一七六二～一八三六）は李瀷（號星湖、一六八一～一七三六）の學統（星湖學派）に連なる人物であり、實學思想家として著名である。その大學解釋を示す主著は「大學公議」一～三（純祖十五年、一八一五、丁若鏞五十四歲の執筆）である。[9]「大學公議」は『大學』全文を引用しながら自らの解釋を施す體裁を採るが、「大學公議」一の冒頭には「禮記四十九篇、鄭目錄大學第四十二」と記され、また以下に引く『大學』本文も『禮記』「大學」と一致する。卽ち丁若鏞が據ったテキストは大學古本である。

丁若鏞は「物有本末、事有終始。知所先後、則近道矣。」の一節を下文の八條目と結びつけて解釋する。具體的には、物とは意心身家國天下、事とは誠正修齊治平である。うち意心身が本、家國天下が末、誠正修が始、齊治平が終である。[10]また致を「至」、格を「量度（はかる）」と訓詁し、致知とは事の先後を知ること、格物とは物の本末を度（はか）ることだとする。[11]これは格物の物を物有本末の物、致知の知を知所先後の知とする訓詁に基づく解釋である。[12]要するに、格物とは物についてその本（意心身）末（家國天下）をはかり知ること、致知とは事についてその始（誠正修）終（齊治平）を知ることである。[13]

このように格物致知とは、八條目のうちの誠意乃至平天下の六條について、その實踐に先立ってあらかじめ本末先後をはかり知ることを意味する。卽ち實質的な着手は誠意から始まるのであって、誠意の前にさらに別個の二條の工夫が存在するわけではない。[14]このような八條目理解を、丁若鏞は自ら「格致六條」と名付けた。[15]

三　本末格物說の分類

本稿が檢討の對象として取り上げた本末格物說は、**【本末格物說一覽表】**に掲げた十七例である。既述の通り、本末格物說の格物解釋は、八條目に關してその本末先後を整序することを以てその基本的骨格とする。その場合、何を以て本とするかによって十七例を分類し、（一）格物爲本類、（二）致知爲本類、（三）誠意爲本類、（四）修身爲本類の四類に區分した。紙幅の都合上、十七例の全てにわたってその詳細を記述することは斷念せざるを得ない。以下では各類ごとに一章を設け、それぞれ典型的な事例若干を取り上げて檢討を加える。

四　格物爲本類～王柏～

格物爲本類に分類されるのは一七例中、①王柏のみである。王柏の『大學』解釋は「答車玉峯」（『魯齋集』卷八）、「大學沿革論」（同卷九）、「大學沿革後論」（同卷一〇）等に示されている。

「大學沿革論」において王柏は、二程及び朱熹による『大學』改訂を基本的には肯定した上で、格物致知に對する傳文は確かに『禮記』所收本には缺落するが、それは逸亡したわけではなく、錯簡によって散在しているに過ぎない、從って朱熹の如く補亡する必要はない、と述べる。[16]具體的には「知止而后有定」以下と聽訟章（「子曰。聽訟吾猶人也。…此謂知本。」）を合わせたものを格致に對する傳文と解釋する。これは王柏が車若水（號玉峯）から得た知見であった。[17]なお右に

【本末格物説一覧表】

	氏名	字 號	生 卒 年	テキスト	分 類	格致解釋	新民親民	卽物窮理評價	格物補傳評價	良知説評價	主 要 典 據
①	王 柏	號魯齋	一一九七～一二七四	自 編	格物爲本		新 民	肯 定	否 定		『魯齋集』卷八「答車玉峯」卷九「大學沿革論」卷一〇「大學沿革後論」
②	黎立武	字以常	一二四三～一三〇三	古 本	誠意爲本	A	新 民				『大學本旨』
③	袁俊翁	字敏齋	一二六〇？～？	章 句	誠意爲本	A	新 民	肯 定	否 定		『四書疑節』卷五「大學」
④	王 艮	號心齋	一四八三～一五四一	古 本	修身爲本		親 民			肯 定	『心齋王先生全集』卷三「語錄」「答問補遺」
⑤	蔣 信	號道林	一四八三～一五五九	古 本	修身爲本	B	親 民				『蔣道林先生文粹』卷八「簡羅念菴內翰」第一書
⑥	王 畿	號龍溪	一四九八～一五八三	古 本	修身爲本		親 民	否 定	否 定	肯 定	『龍溪王先生全集』卷六「格物問答原旨」卷八「大學首章解義」卷一三「贈憲伯太谷朱使君平寇序」
⑦	王 棟	號一菴	一五〇三～一五八一	古 本	修身爲本	格致＝知止	親 民	否 定		肯 定	『一菴王先生遺集』卷上「會語正集」「會語續集」
⑧	羅汝芳	號近溪	一五一五～一五八九	古 本	誠意爲本		親 民			肯 定	『近溪羅先生一貫編』「大學」
⑨	耿定向	號天臺	一五二四～一五九六	石 經	修身爲本		親 民	肯 定		肯 定	『耿天臺先生文集』卷五「答唐元卿」第二書、卷七「格物解」卷一〇「釋石經大學」
⑩	章 潢	字本清	一五二七～一六〇八	古 本	修身爲本	B	親 民	否 定	否 定	肯 定	『圖書編』卷一四（「學大學敍」「大學大旨」他）
⑪	姚舜牧	字虞佐	一五七三舉人	章 句	修身爲本	格致一體	親 民	否 定	否 定		『四書疑問』卷一
⑫	馮從吾	號少墟	一五五六～一六二七	章 句	致知爲本	A	新 民		否 定	肯 定	『少墟集』卷二、語錄「疑思錄」一「讀大學」
⑬	劉宗周	號念臺	一五七八～一六四五	自 編	誠意爲本	AB	親 民			否 定	『劉子全書』卷一二「學言」下、卷三七「大學古文參疑」
⑭	毛奇齡	號西河	一六二三～一七一六	古 本	誠意爲本	B	新 民	否 定	否 定	肯 定	『大學知本圖說』
⑮	湯 斌	號潛庵	一六二七～一六八七	古 本	誠意爲本	A	新 民	肯 定		肯 定	『湯子遺書』卷五「上孫徵君先生書」
⑯	李 顒	號二曲	一六二七～一七〇五	未 詳	修身爲本		親 民	肯 定		肯 定	『二曲集』卷二九「四書反身錄」「大學」
⑰	朱鶴齡	號愚庵	康熙中人	王柏改本	誠意爲本	C	新 民		否 定	肯 定	『愚庵小集』卷七「陽明要書序」卷一〇「與楊令若論大學補傳書」

〔注〕

○黎立武の生卒年及び袁俊翁の生年は、虞萬里「黒城文書《新編待問》殘葉考釋與復原」（『漢學研究』第二一卷第一期、二〇〇三年）に據った。

○A…致知之知＝知所先後之知、B…物格而后知至＝此謂知本、此謂知之至、C…致知之知＝知止之知

○表中で空欄となっている部分は、當該項目に關する明示的な發言を檢出し得なかった場合である。

○底本　①②③⑩⑫⑮⑰…文淵閣四庫全書、④⑧…內閣文庫藏、⑤⑦⑪⑭…四庫全書存目叢書、⑥…近世漢籍叢刊（中文出版社刊）、⑨…明人文集叢刊第一期（文海出版社刊）、⑬…『劉子全書及遺編』上下（中文出版社刊）、⑯理學叢書（中華書局刊）

言う「知止而后有定以下」はまた「知止至近道矣」とも言い換えられているから、「知止而后有定…慮而后能得」から「物有本末、…則近道矣」までを指していることになる。[18] これに聽訟章を合わせたものを八條目の後ろに移し、格致に對する傳文に充てるのである。[19]

「大學沿革論」は自らの『大學』改訂の妥當性を十箇條にわたって列擧するが、その中で格物の「物」及び致知の「知」の字義は自分の確定した傳文中に示されていると述べ（第五條）[20]、さらに本末先後を知ることが格物致知だと斷ずる（第七條）[21]。その場合の本末とは、格物致知誠意正心修身を本、齊家治國平天下を末とする。[22]

ところで格物致知が、八條目について本末先後を知ることを意味するなら、本末先後を知った上で實地に着手すべき實踐項目は誠意以下六條目となるはずである。卽ち實踐過程の全體を整序把握する格致と、具體的實踐項目たる誠意以下とでは本來、その擔う意義が同列ではないはずである。その點で丁若鏞の格致六條說は、論としての整合性を持つ。それに比して王柏は、格致による整序の對象に格致自體を含めている。これは實踐方法論として少なからず不整合であろう。因みに格物補傳を否定したはずの王柏は一方で、卽物窮理的格致解釋を是認している。[23] これは本末格物說としては不徹底である。畢竟するに王柏の問題意識は、あるべきテキストの復元という書誌學的關心にその主眼が在ったのであって、實地に取り組むべき實踐工夫論としては十分に詰め切ったものにはなり得ていないのである。

五　致知爲本類〜馮從吾〜

致知爲本類に分類されるのは⑫馮從吾のみである。馮從吾の『大學』觀はその「讀大學」（『少墟集』卷二、語錄、「疑思錄」一「讀大學」全二五條）によって知ることができる。馮從吾は、大學古本には錯簡があるから、基本的には『大學章句』に據るべきだとする。但し「此謂知本、此謂知之至也」の一節、及びその上の「聽訟吾猶人也」云々の一節は元來一章であって、「此謂知本」は衍文ではなく、「此謂知之至也」の前にも闕文はない。從って『章句』における「右傳之四章、釋本末」の八文字は「此謂知本」節の後に配置すべきである、という。[24] よって馮從吾は格物補傳の必要性も認めない。[25]

格物解釋に關して馮從吾は、格物の物を物有本末の物、致知の知を知所先後の知とする王艮說を、最も妥當な見解とする。卽ち格物とは、如何にして致知乃至平天下すべきか、またそれらにおける本末先後節目次序について、一々明確に講究することに他ならない。[26]

ところで致知の知を知所先後の知と解釋する以上、馮從吾における致知は、先後本末の整序を意味する格物と、一體的に把握されていたはずだ。然るに馮從吾は格物がその本末を整序する對象として、誠意以下六條目ではなく、致知以下七條目を擧げる。これは工夫論として、少なからず不整合であろう。實は致知を「致知所先後之知」の意とした馮從吾は、一方で致良知に對しても肯定的な言及を殘している。[27] 馮從吾の八條目解釋にあって致知の位置づけが少なからず曖昧なのは、この邊りに起因するのかも知れない。

六　誠意爲本類

誠意爲本類に分類されるのは②黎立武、③袁俊翁、⑧羅汝芳、⑬劉宗周、⑭毛奇齡、⑮湯斌、⑰朱鶴齡である。格物致知が本末先後の整序を意味するならば、整序の對象となるのは八條目中から格致の二條目を除いた誠意以下六條目となるのが理路の必然である。誠意爲本類

の事例が多數を占めるのは、蓋し當然であろう。ここでは黎立武と劉宗周を取り上げる。

1　黎立武

黎立武の『大學』觀は主にその『大學本旨』に示されている。『大學本旨』は『大學』本文を引用しつつ自己の見解を敷衍する體裁を採るが、所引本文の內容に徵するに、黎立武は明らかに大學古本に據っている（但し「親民」に對しては「親作新」の小注を付す）。

黎立武は「物有本末」の一節を下文の八條目と關連させて解釋する。[28] その上で格物の物を「物有本末」の物、致知の知を「知所先後」の知と解釋している。從って、物の本末、事の終始に通曉して實踐手順の先後を知ることが格物致知の意となる。[29] より具體的には、意心身家國天下を「本→末」の關係において、「誠正修齊治平」を「始→終」の關係において把握することである。[30]

このように黎立武は誠意乃至平天下の先後本末を整序把握することを以て格物致知を解釋しており、その基本的骨格は格致六條說にほぼ等しい。黎立武の格物解釋を淮南格物說の先蹤と見なす指摘は少なからず存在する。[31] しかし黎立武格致說の主眼は六條目の先後本末の整序に在るのであって、王艮や王棟のように我が身を本とし矩として家國天下を絜度し量度する、といった解釋は全く採られていない。從って黎立武の格物說は淮南格物說の先蹤としてではなく、むしろ格致六條說の先蹤として位置づけられるべきであろう。

2　劉宗周

劉宗周の『大學』觀やその所依のテキストには年齡による變遷が有る。卽ち崔銑による改本を採用していた時期の「大學古記」（『劉子全書』卷三七）「大學古記約義」（同、卷三八、ともに五十二歲）、大學古本と石經大學を折中して獨自のテキストを編定した最晚年の「大學古文參疑」（同、卷三十六、六十八歲）等である。[32] ここでは「大學古本參議」及び「學言」下、四八條、七九條（同、卷一二、ともに六十八歲）[33] に據り、最晚年の大學觀を取り上げたい。

「大學古文參疑」において編定されたテキストは、その冒頭部分（冒頭〜「所謂誠意者」云々まで）に關して言えば、「物格而後…天下平」の一節を「古之明明德…致知在格物」の直後に移動させている點を除けば、全て石經大學に據っている。

劉宗周は格物の物を物有本末の物、致知の知を知所先後の知とする。[34] 知止における止（止まるべき所）とは、本末における本の所在である。從って知止とは知本である。そして知所先後の知を致すことが致知、物有本末の物を格（はか）ることが格物である。[35] なお劉宗周は「此謂知本．此謂知之至也」における「知之至」と「物格而后知至」における「知至」とを同義と解釋する。[36] より具體的には、知本とは誠意が本であると知ってそれを本とすること、知止とは誠意が止まるべきところであると知ってそこに止まることである。そして誠意に止まることが「知之至」であり「致知でもある。[37]

大學古本には「此謂知本」の句が二出する（此謂知之至也の直前、及び聽訟章の末尾、因みに前者を朱熹は衍文とする）。これについて劉宗周は、前者は修身を本とする意、後者は誠意を本とする意と解釋し、修身は「本」、誠意は「本之本」だと述べている。[38]

なお劉宗周は淮南格物說を一定評價した上で、「身が本、家國天下が末と格（はか）り知る」というその解釋への對案として「誠意が本、正心修

身齊家治國平天下が末と格(はか)り知る」との自説を提起している。[39]

このように劉宗周最晩年の格致解釋は、誠意以下の六條目についてその本末先後を整序すること、より具體的には、誠意を爲學の本始として位置づけることを意味するものであり、誠意説をその學問宗旨とする晩年の立場とも照應する（誠意説の確立は五九歳）。

七　修身爲本類

修身爲本類に分類されるのは④王艮、⑤蔣信、⑥王畿、⑦王棟、⑧耿定向、⑩章潢、⑪姚舜牧、⑯李顒である。八條目は格物乃至修身（修己）と齊家乃至平天下（治人）の二項に大別される。前者は明明德と、後者は新民（もしくは親民）と、それぞれ對應する。即ち格物乃至正心の四項は修身の一項に收斂された上で、齊家治國平天下と對置される。さらに大學古本では「自天子以至於庶人、壹是皆以脩身爲本」云々の一節が「此謂知本、此謂知之至也」の直前に位置する。淮南格物説をはじめとする修身爲本類が誠意爲本類と竝んで本末格物説中の多數を占めるのは、これらの理由による。以下、王艮、蔣信、王棟、章潢を取り上げる。

1　王艮

王艮の所謂淮南格物説は、主としてその「語録」及び「答問補遺」において展開されている（『重鐫心齋王先生全集』卷三所收）。[40] 王艮は大學古本に據り、八條目をはさむ前後の文、即ち「物有本末」の一節と、「自天子以至於庶人」の一節及び「此謂知本、此謂知之至也」とを以て、格物致知の解釋に充てる。[41] その上で王艮は、「格」を「絜度(はかる)」、「物」を「物有本末之物」と訓詁する。具體的には身と家國天下の本末關係をはかり知ることが、格物である。從って格物は「知本」とも稱される。また本末とは言うまでもなく、身を本とする謂である。從って修身は「立本」とも稱される。[42]

さて我が身を本とするとは、我が身を矩（さしがね）、天下國家を方（方形）として位置づけた上で、我が身によって天下國家を正すことである。[43] 即ち天地萬物を己に據らしめ、己を正すことで天地萬物を正す、という大人・大丈夫としての氣概と經世意識とが、淮南格物説の眼目であろう。[44]

王艮本末格物説は、格物を知本と規定する點に端的に現れているように、身家國天下についてその本末を整序するという意義を、確かに含意する。但しそれは本末の整序に止まらず、格物という營爲自體に、我が身に推しあてて天下國家を量り正すという、より具體的かつ重要な實踐内容が内包されている。その點、先行する本末格物諸説とは確かに一線を畫する獨得のものである。[45] 格致六條説における格物致知が、誠意以下六條目についてその本末先後を整序すること以上に特段の實踐内容を持たぬ點とも、大きく異なっている。

なお陽明門下の王艮に始まる淮南格物説を王守仁の格致解釋と對比した上でどのように位置づけるべきかという問題がなお殘されているが、これは王棟の項で檢討することとしたい。

2　蔣信

蔣信は羅洪先（號念菴、一五〇四～一五六四）に宛てた書翰中において自らの『大學』解釋を披瀝し、教示を請うている。即ち『蔣道林先生文粹』卷八「簡羅念菴内翰」第一書である。同書において蔣信は、以前にも「古大學」の義について卑見を述べたが、今、再度教えを請

いたいと斷っており[46]、また以下に觸れる『大學』引用の仕方に徵しても、大學古本に據っていることが明らかである。

さて蔣信は「物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣。」の一節について、その所謂「物」が何を指すかは下文に示されているとし、八條目の兩節、「自天子以至於庶人」乃至「其所薄者厚、未之有也」、及び「此謂知本、此謂知之至也」とを連續して引用する[47]。物とは身家國天下であり、そのうち身が本、家國天下が末である[48]。また蔣信は「物格而后知至」と「此謂知本、此謂知之至也」の兩句を重ね合わせ、格物致知を一體的に把握し、ともに知本の意で解釋する。卽ち知本とは身が本であると知ることであり、それが知之至（＝致知）でもある[49]。「物格」と「知本」とは同義であって「格」は「格知（しる）」と訓詁すべきである[50]。

身家國天下は渾然たる一物であって身が本、家國天下が末である。そのことをよく自覺して廣大なる心を獲得し、その心を本として他者と好惡を共有（「公好惡」）すべきである[51]。卽ち致知とは、我が心が本來備えている廣大なる知を回復する營みであり、格物とは、物とは何かを看破する營み（＝身家國天下の本末を明確に認識すること）である[52]。

蔣信の言う「吾心廣大之知」には、知を天下の矩として天下の方を實現する、という機能さえ想定されている如くである[53]。このように蔣信の格物解釋には、王艮淮南格物說を彷彿とさせるものがある。ただ蔣信は同書中において、嘉靖二年癸未（一五二三）に自己の格物解釋を湛若水に示して叱正を請うたが是認されなかったと述べている[54]。一方、王艮が自らの格物解釋を樹立したのはその五十五歲（嘉靖十六年丁酉、一五三七）のこととされている[55]。してみれば蔣信が王艮說の影響を受けたことは、時期的にもあり得ない。

3　王棟

王棟は王艮門下であり王艮とは同族でもある。王棟の『大學』觀はその「會語正集」「會語續集」（以下「正集」「續集」と略稱、ともに『一菴王先生遺集』卷上所收）に散見する。王棟には大學古本によって聖學の工夫を了悟したという趣旨の述懷が有り、王艮同樣に大學古本に據ったものと思われる[56]。

王棟は格物の格を「格式」「比則」（ともに準則の意）、「推度」「絜矩」（ともに「はかる」の意）とし、また物を物有本末の物とする[57]。物とは身家國天下であり、身が本、家國天下が末である[58]。格物とは身家國天下についてその本末をはかることであり、また吾が身に照らして天下國家の人を推し量ることでもある[59]。格物致知とは至善に止まることを知ること（「知止」）であり、それは具體的には修身を爲學の根本に据えること（「修身立本」）である[60]。修身を根本に据えるとは、他者をとがめ責めることを專らとせず、まず以て自らを修め自らを責めるあり方を指す[61]。それ故に格物は「反身工夫」（正集一七條、一八條）「反己格物」（正集四七條、五一條）「正己格物」「反身格物」（正集一一八條）等と稱される。

このように王棟の格致說は、自己に照らして他者の立場を推し量り、他者を責める前にまず以て自責自修することに主眼を置くものであり、王艮の場合同樣、單に身家國天下の本末先後を整序するのみにとどまらず、重要な實踐內容をそれ自身が明確に內包している。

なお王門に分類される王艮や王棟が王守仁の格致解釋、とりわけ致良知說を採用しない點を如何に評價すべきか、という問題がある。王

棟は朱熹卽物窮理說を明確に否定するが[62]、その一方、致良知說をも是認しない。そもそも王守仁が『孟子』に卽して提起した良知と『大學』「致知」の知とは、同じものではない[63]。王守仁は當初こそ致良知を說いたが、後には專ら良知を說いたのであって、王守仁の宗旨を致良知とするのは傳承の誤りだ、とさえ斷じている[64]。

ただ王棟における致良知否定は、良知心學そのものに對する否定では決してなく、むしろその徹底でさえある。なぜなら良知は、改めて「致す」ことを要しない程に十全な存在であるからだ[65]。王棟はしばしば良知の「具足」「自完自足」を强調しているのである[66]。

4　章潢

章潢の『大學』觀はその『圖書編』卷一四（「學大學敍」「大學大旨」「明親止」「知止」「格物（一）」「格物（二）」「修身爲本」「毋自欺」「孝弟慈」「絜矩」）によって知ることができる。章潢は「學大學敍」の冒頭に朱熹「大學章句序」及び王守仁「大學古本序」「大學問」を引用しているが、『大學』は元來一章の書であって經傳の區別はなく、また缺文はなく從って補缺の必要もない、とも述べている[67]。また「大學大旨」における經文引用の仕方等に徵しても、大學古本に據っていることが判明する[68]。

章潢も格物の物を物有本末の物と解釋する[69]。具體的には、物とは身家國天下であり、そのうち身が本、家國天下が末、そして身が家國天下の本だと知ることが「知本」であり「知之至」である[70]。

なお章潢は經文「物格而后知至」及び「此謂知本、此謂知之至也」における「知至」と「知之至」とを同義と見なしている[71]。卽ち章潢は「格物致知」「知本知至」を一體的に把握しているのであって、修身を本とすると知ることが格致であり知本知至である[72]。

章潢のかかる格物解釋は、その萬物一體觀に裏付けられている。卽ち修身を根本に据え、天地萬物を通じて一身とし、天下國家を合して一體とすることが『大學』知止知本の道である[73]。そして吾が身と家國天下が一體であり得るのは、孝弟慈という普遍的德目の存在による[74]。それはまた自己と他者とはその好惡を共有し得る、との認識でもある[75]。自他がその好惡を共有できれば（「公好惡」）、身家國天下は一體となる[76]。同樣に是非の判斷に關しても、公是公非である限り、それは家國天下において共有されるものとなる[77]。

ではかかる公好惡、公是公非は、如何にして獲得されるのか。人間は誰しも心に定理を具える。定理とは決して固定的好惡（「定好惡」）ではなく、他者の心を推し量ること（「絜」）を通して定まるのである[78]。このように章潢の格物とは、一義的には身が家國天下の本であると知ることだが、その內實は、吾が身の好惡に照らして他者の好惡を推し量り、公是公非を確立することまでもが含意されている。從って章潢は格物と絜矩は同義であるとも述べている[79]。

八　本末格物說の位置づけをめぐって

以上、本末格物說の四類にわたって、それぞれの具體例を檢討した。以下では改めて十七例全體を見渡した上で本末格物說の特質を考察し、思想史上の位置づけを試みたい。

1　誠意爲本、修身爲本と格致六條說

繰り返し述べてきたように、本末格物說における格物の基本的意義は、八條目についてその本末始終を整序することにある。その場合、

格物によって整序される對象に當の格物が含まれることは、論理的にも少なからず不整合である。格物爲本類の事例が稀少なのは理の當然であろう。

また十七例中、致知の知を知所先後の知と解するのは②③⑫⑬⑮の五例、「此謂知本、此謂知之至也」と「物格而后知至」を重ね合わせて解するのは⑤⑩⑬⑭の四例、格致を知止の意と解するのが⑦の一例、致知の知を知止の知と解するのが⑰の一例。また以上のような訓詁上の指摘はなくとも、格致を一體的に把握しているのが⑪の一例。以上のうち⑬における重複を除いた計十一例が、格致を本末先後の整序（＝知本＝知止）の意に解釋したものとなる。そしてその場合、格致による整序の對象からは格物とともに致知も除かれることになる。致知爲本類が⑫馮從吾の一例のみであり、かつ馮從吾説が論として破綻を來していることは既に指摘した通りである。

格致六條説の眼目は、格致による整序の對象から格致自體を除いた點にある。その上で殘った六條目のうち、誠意を本、平天下を末とすれば誠意爲本類となり、誠意正心を修身に收斂させた上で修身を本、齊家治國平天下を末とすれば修身爲本類となる。即ち誠意爲本類と修身爲本類はともに格致六條説のバリエーションとして整理するのが妥當であろう。その意味でも、本末格物説を系統的に整理し理解する上で、格致六條説は重要な指標となり得るものであった。

2　淮南格物説と修身爲本

丁若鏞格致六條説における格物致知は、本末始終の整序以外には、特段の實踐内容を持たない。淮南格物説が、吾が身に推し當てて天下國家を量り正す（王艮）、我が身に照らして天下國家の人を推し量る（王棟）といった明確な實踐内容を具えることとの間には、少なからぬ懸隔が有る。その意味で淮南格物説は、本末格物説中にあって獨自の一類型を形成し得るものと言えるだろう。ただそのような事例は、他者と好惡を共有すること（公好惡）を説いた蔣信や、我が身の好惡に照らして他者の好惡を推し量り公是公非を確立することを説いた章潢においても、確認することを得た。そしてこれらの格物解釋に見られる共通項（格物が、本末始終を整序する意に加え、自己に照らして他者を推し量る意をも含意すること）は、淮南格物説という括りにおいて理解するよりは、むしろ修身爲本類という括りにおいて理解すべきであろう。何となれば身を本、家國天下を末とする本末觀は必然的に、自己が他者と如何に對峙し他者との關係を如何に構築すべきかという問題意識をもたらすからである。無論、修身爲本類の全てがかかる格物解釋を共有するわけではないが。

3　朱子學との關係

本稿冒頭にも指摘した通り、本末格物説は『大學章句』に據っても成立は可能である。但しその場合、傳第五章に展開される格物解釋との抵觸は避け難い。一覽表に示した通り十七例中『大學章句』に據ったものは三例有るが、それらはいずれも朱熹の格物補傳に對して否定的である（③⑪⑫）。また「格物補傳評價」の項が空欄になっているのは評價に關する明確な發言を檢出し得なかったケースだが、上記三例以外の全てがそもそも『大學章句』以外のテキストを採用していること自體、『大學章句』に對する否定的立場を雄辨に物語っている。即ち本末格物説は、全面的にせよ部分的にせよ、まず以て『大學章句』を否定するところに成立する解釋なのである。

ただ一覽表中にあって、卽物窮理說に對する肯定的評價が五例見られる點に關しては、補足しておかねばなるまい（①③⑨⑮⑯）。①王柏のケースに關しては既に觸れた。③袁俊翁は、そもそも「物有本末」の一節に關して、上文兩節を締め括るとする朱熹の解釋と下文を說き起こすものとする解釋の兩論を併記している。卽物窮理說が許容されるのはその爲であって、その點で袁俊翁の本末格物說は王柏同樣、少なからず朱子學的解釋と折中的である。⑨耿定向の場合、司馬光の「格去物欲」、朱熹の「卽物窮理」、王守仁の「格其不正以歸於正」のいずれもが實踐に資するものであると述べており、これも兩可折中的である。⑮湯斌の場合、朱熹を支離、王守仁を虛寂と譏るのはいずれも後學による流弊の咎を朱王その人に歸する見解であって妥當ではない、という文脈で卽物窮理說が許容されている。また⑯李顒の場合、格物とは身心意知及び家國天下に卽してその理（＝至善、則）を窮めることだと述べ、また身心意知（本）と家國天下（末）に卽してその本末の序を究めることだとも述べており、これも卽物窮理說と折中的である。

4　陽明學との關係

一覽表に示した通り、陽明學出現以降に當たる④～⑰の十四例中、十一例で良知說に對する肯定的立場が確認される。この中には致知の知を知所先後の知とする⑫馮從吾、⑮湯斌、知止の知とする⑰朱鶴齡も含まれている。彼らにあって、少なくとも『大學』致知解釋の文脈からは、致良知說は導き出し得ないはずである。ただ馮從吾は、既述のように致良知說そのものに肯定的に言及しているし、また湯斌は先にも觸れた朱王兩可調停的な文脈で王守仁による良知說の唱道を肯定的に評價している。朱鶴齡には「陽明要書序」（『愚庵小集』卷七）の一文が有り、陸王心學を表彰する文脈で致良知說が肯定的に言及されている。

同じく上記十四例中、三綱領について親民說を採用する者は十例である。ただその一方で新民說を採ってかつ良知說を肯定する者が四例（⑫⑭⑮⑰）、親民說を採ってかつ良知說を否定する者が一例（⑬）、この五例では親民說でかつ良知・致良知を主張するという陽明學の立場と完全には合致しない。

おわりに

本末格物說を思想史上に如何に位置付けるべきかは、難しい問題である。一覽表で示し、かつ前章でも指摘した通り、朱子學的經書解釋の採否と朱子學的實踐方法論の採否、あるいは陽明學的經書解釋の採否と陽明學的實踐方法論の採否とが、必ずしも一對一に對應しない事例が少なからず存在する事實を前にすると、一層その感を强めざるを得ない。ただ本末格物說は、『大學』テキストとして『大學章句』を採用しないか、少なくともその格物補傳は否定する、という共通項で括られる點は、十分に重きを置いて受け止めるべきだろう。その限り、本末格物說はまず以て非朱子學的經書解釋として位置付けることができる。より具體的には、本末格物說は、『禮記』「大學」は格致に對する傳を缺亡するという朱熹の論定を否認することを、その出發點とする。そこから所依のテキストに關しては、『大學章句』の部分的修正、自編テキストの採用、大學古本の採用、石經大學の採用といったそれぞれの立場が採られることとなる。

陽明學登場以降の本末格物說について言えば、論者それぞれの據っ

て立つ思想的立場は本より一律には論じ得ないが、陽明學に對して肯定的な者が多數を占めるという全體的傾向は、これを認めることができる。右に云う肯定的な者の中には、『大學』致知解釋としては致良知說を採らないものの實踐方法論としての致良知說はこれを是認する、という者も含まれていた。卽物窮理說にせよ致良知說にせよ、本來はそれぞれの經書解釋に立脚し、從ってそれと不可分に結びつく形で、提起されたはずだ。ただそれが方法論として旣に確立し、一定の流布流行を見ると、論據としての經書解釋とは切り離した形での受用形態も出現し得る。本末格物說における陽明良知說肯定の事例は、そのような事態の存在を示唆するものでもあろう。

「格物之物」＝「物有本末之物」という解釋の中では淮南格物說が突出して著名であるため、同樣の格物解釋も淮南格物說との關係・類似という觀點で論じられがちである。しかしながら淮南格物說も、本末格物說中の一類型（修身爲本類）に過ぎない。むしろ黎立武をその先蹤とし丁若鏞によって提起された格致六條說を一指標とし規準とすることで、本末格物說のより系統的な整理が可能となる。本稿はそのような立場に立って本末格物說を考察したものである。

注

（1）劉宗周『劉子全書』卷三八「大學雜言」二二條「格物之說、古今聚訟有七十二家。」

（2）例えば唐君毅『中國哲學原論　導論篇』第九章の五「附論朱王二家以外與本文所陳者相類似之格物說」（『唐君毅全集』第十二卷、臺灣學生書局、一九九一年）が八種の格物解釋を紹介する中には、本稿で取り上げた黎立武、王艮、蔣信、李顒の各說が含まれている。ただしこれは必ずしも本末格物說に着目する觀點から論及されたものではない。管見の及ぶ所、この問題に着目した唯一の先行研究は荒木龍太郎「良知現成論者の考察――渾一と一貫の視點から――」（『日本中國學會報』第五八集、二〇〇六年）である。荒木氏は王畿、耿定向、羅汝芳、楊起元、王艮の格物說を取り上げて檢討を加え、またこれらを「本末の格物說」と表現している。本稿における用語もこれを踏襲したものである。

（3）朝鮮においては、後述する丁若鏞に先だって李彦迪、愼後聃、安鼎福、權哲身、李匡師、李令翊等が同樣の格物解釋を採用している。うち權哲身については注（9）所引の拙稿、また李匡師と李令翊については以下の拙稿を參照。「信齋李令翊と椒園李忠翊――初期江華學派における陽明學受容――」（『關西大學　東西學術研究所紀要』第四〇輯、二〇〇七年）「圓嶠李匡師緒論――初期江華學派における陽明學受容――」（『朝鮮史研究會論文集』第四六集、二〇〇八年）。

（4）荒木見悟「石經大學の表章」（『明末宗教思想研究――管東溟の生涯とその思想――』所收、創文社、一九七九年）、同氏「唐伯元の心學否定論」（『陽明學の展開と佛教』所收、研文出版、一九八四年）參照。

（5）「明德爲本、新民爲末。知止爲始、能得爲終。本始所先、末終所後。此結上文兩節之意。」

（6）『王文成公全書』卷二六「大學問」「曰。物有本末、先儒以明德爲本、新民爲末、兩物而內外相對也。事有終始、先儒以知止爲始、能得爲終、一事而首尾相因也。如子之說、以新民爲親民、則本末之說、亦有所未然歟。曰。終始之說、大略是矣。卽以新民爲親民而曰明德爲本、親民爲末、其說亦未爲不可。但不當分本末爲兩物耳。」

（7）石經大學のテキストには王文祿『百陵學山』所收「大學石經古本」（百部叢書集成所收）を用いる。

（8）荒木龍太郎氏は「本末の格物說」と石經大學の結びつきを示唆してお

られる（荒木龍太郎前掲論文、頁一五〇）。慧眼ではあるものの、本末格物說は石經大學を所依のテキストとする時にのみ成立するわけではない點にも留意すべきであろう。

（9）丁若鏞『與猶堂全書』第二集（影印標點韓國文集叢刊、二八二冊）所收。なお丁若鏞の大學解釋については拙稿「丁若鏞の『大學』解釋について――李朝實學者の經書解釋――」（『京都府立大學學術報告（人文・社會）』第五四號、二〇〇二年）參照。

（10）「大學公議」二「物者、意心身家國天下也。事者、誠正修齊治平也。本始所先、末終所後。…意心身、本也。家國天下、末也。…誠正修、始也。齊治平、終也。」

（11）同上「致、至之也。格、量度也。極知其所先後、則致知也。度物之有本末、則格物也。」

（12）同上「宋黎立武大學發微云。格物卽物有本末之物、致知卽知所先後之知。…鏞案、黎氏、宋儒也。此論之發盍久矣。其言甚粹。」

（13）同上「意心身家國天下、明見其有本末、則物格也。誠正修齊治平、明認其所先後、則知至也。」

（14）同上「然則修身原以誠意爲首功、從此入頭、從此下手。誠意之前、又安有二層工夫乎。」

（15）同上「文雖八轉、事惟六條。格物致知、不當幷數之爲八。名之曰格致六條。」

（16）王柏による『大學』改訂に關しては佐野公治『四書學史の研究』頁一六七（創文社、一九八八年）參照。

（17）「大學沿革論」「咸淳已巳（五年、一二六九）、得黃巖玉峯車君書報予曰。致知格物傳、未嘗忘也。自知止而后有定以下、合聽訟一章、儼然爲格致一傳。于是躍然爲之驚喜。有是哉、異乎吾所聞也。苟無所增補而舊物復還、豈非追亡之上功乎。」

（18）「大學沿革後論」「一日聞大學格致章不亡、不特車玉峰有是言也。自董鉅堂以來、已有是言矣。…乃欲以首章知止至近道矣一段充之、未免躍如其喜。」右文中の董鉅堂は董槐。董槐及び車若水による改訂に關しては佐野公治前掲書、頁一六六～一六七を參照。

（19）「答車玉峯」「今若以程伯子本、移知止於八目之後、誠意章傳之前、尤爲省力。」

（20）「古人不區區于字義、只說大意而字意在其中。況此既有知字物字、自然爲格致之一傳。五也。」

（21）「物則有本末、事則有先後、知其本之當先、末之當後、是謂致知在格物也。聽訟者末也。無訟者本也。…此物格矣。此之謂知本、卽此之謂知至也。七也。」

（22）「大學沿革後論」「第五節七后字、方是自始而至終、自本而及末。…凡格物致知誠意正心、皆成就脩身二字。指此爲本、則齊家至平天下、皆末也。」右文中の「第五節七后字」とは「物格而后知至」乃至「國治而后天下平」を指す。

（23）「大學沿革後論」「蓋致知只在格物之中、窮物之理、所以致吾之知也。」

（24）二三條「大學古本、原有錯簡、還當依朱子章句爲是。第此謂知本、此謂知之至也一節、與及上聽訟節、雖分兩節、原是一章、非衍文、亦非別有闕文也。右傳之四章釋本末八字、當序在此謂知本節之後。」

（25）二四條「一本大學、都是釋格物、不必另補格物傳。」

（26）六條「王心齋謂、格物是格物有本末之物、致知是致知所先後之知、最爲有見。格物、是格其知如何致、意如何誠、心如何正、身如何修、天下國家如何齊治平、中間孰爲本、孰爲末、孰當先、孰當後、節目次序、一一講究明白、則誠正修齊治平功夫才得不差。」

（27）一二條「良知是人人有的。只是君子肯致、小人不肯致耳。」

（28）「物有本末、指心身家國天下而言。事有終始、指格致誠正修齊治平而言。…先字總下六先、后字總下七后。」

（29）「格物卽物有本末之物、致知卽知所先后之知。蓋通徹物之本末事之終

始、而知用力之先後耳。」

(30) 「天下之本在國、國之本在家、家之本在身、身之主在心、心之發爲意、此物之本末也。誠而正、正而修、修而齊、齊而治、治而平、此事之終始也。」

(31) 『經義考』卷一五七、及び『欽定續文獻通考』卷一五二の黎立武大學發微大學本旨の條、毛奇齡『大學證文』卷一。

(32) 林慶彰「劉宗周與《大學》」(『劉蕺山學術思想論集』所收、中央研究院中國文哲研究所籌備處、一九九八年)を參照。

(33) 「學言」各條の繫年に關しては拙稿「劉宗周の「學言」について――愼獨說から誠意說へ――」京都大學中國哲學史研究會『中國思想史研究』第二五號、二〇〇二年)參照。

(34) 「大學古文參疑」「物有本末」條「物卽是格物之物、知卽是致知之知。」「學言」下、四九條「致知在格物、則物必是物有本末之物、知必須是知所先後之知。」

(35) 「大學古文參疑」「子曰聽訟」條「止之、卽所本之地也。知止、所以知本也。致此之知、是爲致知。格此之物、卽格物。」

(36) 「大學古文參疑」「此謂知本此謂知之至也」條「承上文而言知至物格之義、煥然矣。」

(37) 「大學古文參疑」「所謂誠其意者」條「蓋惟知本、斯知誠意之爲本而本之。本之斯止之矣。亦惟知止、斯知誠意之爲止而止之。止之斯至之矣。卽誠卽致。」

(38) 「大學古文參疑」「按古本聽訟下此謂知本、與前此謂知本少異。前者言修身爲本、後者言誠意爲本。修身、本也。誠意、本之本也。」

(39) 「學言」下、七九條「後儒格物之說、當以淮南爲正。曰。格知身之爲本、而家國天下之爲末。予請申之曰。格知誠意之爲本、而正修齊治平之爲末」

(40) 王艮淮南格物說に關する先行研究は多數存在するが、ここでは最新の優れた成果として吳震『泰州學派研究』(中國人民大學出版社、二〇〇九年)を擧げておく。

(41) 「語錄」二條「自天子以至於庶人以下數句、是釋格物致知之義。」同、三條「格物之物、卽物有本末之物。其本亂而末治者否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。此格物也。故卽繼之曰。此謂知本、此謂知之至也。」三條における『大學』引用の仕方に照らして古本に據ったものと判斷する。

(42) 以上「答問補遺」三條「身與天下國家、一物也。惟一物而有本末之謂。格、絜度也。絜度於本末之閒而知本亂而末治者否矣、此格物也。物格、知本也。知本、知之至也。故曰。自天子以至於庶人、壹是皆以脩身爲本也。修身、立本也。」「物」の訓詁については前注所引を參照。

(43) 「語錄」一三七條「吾身猶矩、天下國家猶方。天下國家不方、還是吾身不方。」「答問補遺」四條「吾身是箇矩、天下國家是箇方。絜矩、則知方之不正由矩之不正也。是以只去正矩、却不在方上求。矩正則方正矣。」

(44) 「語錄」八條「大人者、正己而物正者也。故立吾身、以爲天下國家之本、則位育。」同、三二條「知得身是天下國家之本、則以天地萬物依於己、不以己依於天地萬物。」同、九八條「大丈夫存不忍人之心、而以天地萬物依於己。故出則必爲帝者師、處則必爲天下萬世師。」

(45) 王艮格物說は、その長子王衣の着眼に觸發されたものとされている。『心齋王先生全集』卷二「世系詳註截畧圖」「王衣」「會物有本末之旨、啓父格物之學。」同卷六「配享列傳」「王衣」「悟物有本末之物、啓先公之首肯。」なお吳震前揭書頁一〇〇～一〇六參照。

(46) 「雖嘗不揣以古大學義呈覽、顧今則似不可不再正請正。」

(47) 「物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣。…猶未見所謂物云何也。卽繼之曰。」以下に本文中で示した順で『大學』を引用。この引用から蔣信が大學古本に據っていることが確認できる。

(48) 「夫謂身爲本、則家國天下爲末、明矣。身爲本、家國天下爲末、則所

謂物者、卽指身家國天下、明矣。」

(49)「身家國天下、同爲一物、而身爲物本、家國天下爲物末、則所云知本者、是謂知身爲物本也。所云知之至者、謂知身爲物本、乃知之至也。」

(50)「又由此謂知本一言觀之、分明卽此謂物格、以知本二字代物格二字、格字固不容別爲訓釋、而其爲格知之義、已明證之。」

(51)「此其意、不在於欲人大開眼目、觀於身家國天下、渾渾一物、身爲其本、家國天下爲其末、而因以自得其廣大之心、廓然貫通乎家國天下、有以爲公好惡之本哉。」

(52)「故致知在格物者、謂欲復吾心廣大之知、在覷破此物事而已。」

(53)「盍知止之後、知之所以常明、能爲天下之矩、以出天下之方者。」云々。

(54)「嘉靖癸未春、見甘泉翁京邸時、嘗卽以是質之。…至如鄙見論格物、則猶謂不然。」因みに蔣信は王守仁と湛若水の雙方に師事した人物である。『明儒學案』卷二八、楚中王門學案「蔣信」。

(55)『心齋王先生全集』卷二「年譜」「（嘉靖）十六年丁酉先生五十五歲」條「是歲先生玩大學、因悟格物之旨。」この記述が信を置くに足るものである點に關しては吳震前揭書頁一〇〇～一〇六參照。

(56)續集八〇條「寓京邸日、取大學古本讀之、忽自省曰。聖學工夫、是多少精微細密。安可以口耳處見襲取得之。」

(57)正集一五條「格如格式。有比則、推度之義。…物卽物有本末之物、謂吾身與天下國家之人。」續集七條「今先師云、格卽絜矩之義、物乃物有本末之物。」王棟の云う先師とは王艮を指す。

(58)續集五條「且先師說物有本末、言吾身是本、天下國家爲末。」

(59)續集七條「格卽絜矩之義、物乃物有本末之物、絜度於心孰本孰末。」正集一五條「格物云者、以身爲格而格度天下國家之人。」

(60)正集二〇條「知止、卽物格而知至也。」同五九條「物格而知至也、實乃止至善工夫。」同六〇條「蓋自物格而知至而來、乃決定自以修身立本之主意也。」なお本稿において修身爲本類に分類した王棟思想の特質が、意を「心之主宰」（正集二一條、二四條）とするその獨自の誠意說に在ったことはよく知られている。詳細は省くが、王棟は誠意を修身立本を實現する爲の工夫として位置付けている。吉田公平『陸象山と王陽明』頁三一五～三一七（研文出版、一九九〇年）、吳震前揭書、頁二四九～二五〇參照

(61)續集七條「一心修己立本、更不尤人責人。」同二一條「自責自修、學之至要。」

(62)正集一八條「後儒專以卽物窮理爲格物、而不反身立極知止至之。何以承孟子之統哉。」

(63)「明翁是於孟子不慮而知處、提出良知二字、指示人心自然靈體。與大學致知不同。」

(64)正集一〇條「先師云。明翁初講致良知、後來只說良知。傳之者、不察耳。」これが實際に先師王艮の言葉であったのだとすれば、致良知說に對する評價に關しても王艮と王棟はその認識を共有していたことになる。但し現存する王艮の著作中にはこれに類する發言は確認されていない。吳震前揭書、頁二二九～二三〇參照。

(65)正集九條「若明翁所指之良知、乃是大人不失赤子之知、明德渾然之體、無容加致者也。」同一〇條「學者之於良知、亦只要識認此體端的、便了。不消更着致字。」

(66)正集五三條「良知本體、人人具足、不論資質高下、亦不論知識淺深。」同九三條「心性良知、自完自足、不須聞見幫補、不假知能襯貼。」

(67)「學大學敍」「大學原是一章書、無所謂經、無所謂傳也。亦無所從缺、無所從補也。」

(68)「大學大旨」「獨不思此謂知本、此謂知之至也、此謂二字、得非承上文物有本末、物格而後知至言之乎。」

(69)「大學大旨」「天之生物、使之一本、安得有二本也。惟不信格物之物卽物有本末之物、故有二物、卽有二本矣。」「格物（一）」「前云物有本末、

後云致知在格物、物果有二乎哉。」

(70)「學大學敍」「卽修身爲本一語觀之、謂身爲本、則國家天下爲末、明矣。身爲本、家國天下爲末、則所謂物者、卽身家國天下、同爲一物、明矣。身爲物本、家國天下爲物末、則所謂知本爲知之至者、卽知身爲家國天下本、乃所謂知之至也、又明矣。」

(71)「格物（一）」「前云物格而后知至、後云此謂知本、此謂知之至、知至果有二乎哉。」

(72)「大學大旨」「眞能知修身爲本者、此謂知之至也、非卽物格知至之謂乎。」「格物（一）」知修身爲本、斯爲知本、斯爲知至、卽所謂知止、卽所謂物格而知至也。」

(73)「修身爲本」「此所以學必求乎大學知止知本之道、而後可以通天地萬物爲一身、合天下國家爲一體也。…學大學者、果知修身爲本、則知吾身卽天地也。」

(74)「孝弟慈」「天下國家、本諸身、學誠大矣。究其本旨、身之所以通乎家國天下者、不出孝弟慈也。」

(75) 同上「觀己之好惡出于太虛、未嘗不通之人、人之好惡出于太虛、亦未嘗不通之己、可見也。所以仁者與物同體。」

(76)「大學大旨」「人心所發、不越好惡兩端。公好惡、則通之家國天下。」

(77)「絜矩」「故一人之公是、一家是之、一國是之、天下莫不以爲是也。一人之公非、一家非之、一國非之、天下莫不以爲非也。」

(78) 同上「大匠有定規而矩無定方也。君子之心有定理而理無定好惡也。此心之矩、在絜之者何如耳。能絜、則以我之心同天下人之心。」

(79)「毋自欺」「末章以絜矩爲平天下之道、豈格物之外、別有絜矩云乎哉。絜矩卽格物之義、毋自欺卽格物絜矩之實也。」「絜矩」「絜矩則愼獨格物。言殊而義則一也。」